

---

et cetera.

loco

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

e t c e t e r a .

### 【Nコード】

N 5 2 7 1 0

### 【作者名】

l o c c o

### 【あらすじ】

\*\*\*\*\*

日々が連鎖して  
いまに繋がったと言っなら、

俺は生きたいと思うんだ。

\*\*\*\*\*

基本一話完結形式です。

封を切る。

\*\*\*\*\*

時々自分はとってもちっばけで、世界に必要なんじゃないかって  
思う時がある。

そう、俺がいなくなったって、世界は変わらずに進んでいく。

「ノリマキ！パス！」

俺はハツとして足元にあるボールを蹴る。

アウトサイドからインサイドへと大きく弧を描いたボールは、チームメイトへと届いた。その男が見事なドリブルでフィールドを駆け上がってゆく。ひとり、ふたり、さんにな抜いた！勢いのままシュート。…残念、キーパーの目の前だったか。

ピピッ。

終了を告げる笛が鳴り響き、体育教師が集合をかける。授業が終わったのだ。

「くっそ、あと少しだったのになあ」町田薫がワイシャツのボタンに手を掛けながら呟いた。そう、こいつが、シュートで失敗した張本人。

「町田、最後見切れてなかったろ」そう言って茶化してきたのは堀巻大貴だ。みんなからはたいちゃんと呼ばれている。

「せっかく、ノリマキがいいロングパスくれたのにマジおいしいことした」サッカー部の町田はどうやら悔しさがまだ続いているようだった。部活を引退した今も、町田はサッカー部に顔を出したりフットサル場に通って体を鈍らせないようにしていると聞いた。そーゆーの、すげえ、って思う。本当に好きなんだなあ、サッカー。

「確かにノリマキ、ぼけ〜としてたのにいいキックしてたな」こーんな顔してさ、とたいちゃんは変顔して俺を真似て見せた。3人で笑う。

俺は大体、こいつらとつるんできることが多い。今年理系に転じてきたから、ふたりのことはよく知らなかった。いや、顔は知ってたけど共通の知り合いなんていなかったし。けど、出席番号が近いこともあって新学期早々にすぐ打ち解けた。

理系クラスになってまず感じたのは、体育後の空気がなんとも男臭いことだった。文系クラスは男女比が半々くらいだったから、制汗

剤のフローラルな匂いが懐かしい。

俺の名前は牧紀行という。あだ名はノリマキ。まきのりゆき、まきのり、のりまき…という具合でついた。ノリマキって呼ぶやつもいれば、マキノリっていうやつもいる。でも、あんまり気にしてない。呼び名なんて伝わればいいの、伝われば。

趣味は、んーそうだな、人間観察ってとこ。最近のターゲットはズバリたいちゃん。たいちゃんさ、いま恋してるから見てて楽しいんだ。隣のクラスの女の子。たまにうちのクラスに来るんだよね。たいちゃんってクラスのムードメーカーでいつもバカやってるくせに、その子が来ると急に大人しくなっちゃうの。赤い顔して横目でチラチラと見つめてんだよ。いい加減話しかけなよ、って内心思うけど、本人は隠してるつもりでいるからこっちも様子見。このことは町田も気付いてる。っていうか、たぶんクラス中気付いてる。分かり易いんだもん。知らないの、彼女くらいなんじゃないの。笑っちゃうよねえ。

「堀巻大貴くん、堀巻大貴くん、そろそろ夏休みが始まりますよ、いいんですかーあ」

町田はウズウズを通り越して若干イライラしてる。プレイボーイの町田からしたら、もどかしいのかもな。

「あん？　おう。一緒に海いこーな、海！」

「ばっか」呑気な発言に嫌でも突っ込んでしまう。「アドレス、そ

ろそろ聞けよって言うてんの」

「!?!? ……な、なんのことかな」明らかに動揺してる。バカだねえ、たいちゃん。それじゃ嘘ついてますって言うてるようなもんだよ。

「たいちゃん、目え泳いでっから。」町田は込み上げる笑いを抑えられないって感じた。「サクラチヒロ、だっけ?」

「…し、知ってたのか…?」

「バレバレ。」町田と声が八もった。大体気付かずに過ごせっるのが無理だよ。

たいちゃんの顔が真っ赤になった。やべえ、超純情。

いーなーたいちゃん、青春じゃん。

いーなー。

俺も恋とかしたら、たいちゃんみたいになれたりすのかな、ってたま〜に考えるんだ。

俺?

いまフリー。好きなやつもここ最近いない。

てか本当に好きって思ったこと、ないかも。

最近、友達に誘われてN女と合コンした。カラオケで飲んで歌つて、みたいな。みんなと別れたあと、化粧バッチリの女が手を絡めてきて、キスしてつてせがんできたからしてやった。俺も酔ってたからさ、もうすっげえやつ。そしたら、女、とろくんとしちやっつてさ、俺笑いそうになったね。続きしたいっていうから、近くの公園行ってやった。ホテル代なんてねーもん、俺。あつち、涙流して喜んでたね。俺もまあ普通に気持ちいいけど、なんつーかそれだけ。好きとかそんなじゃないんだ。だから、帰りにアドレス聞かれたけど断った。したら、涙でアイメイクのよれた目で思いつきり睨んだあと去ってつた。調子のんなよ、とも言われたっけ。実はあんまり覚えてない。

俺、あんたの言うままにただけよ。女ってよく分かんねーわ。ひとり残された公園のベンチで夜空を見上げて、でも、とも思う。

でも、自分が一番よく分かんないんだ。

俺なんのために生きてんの？

なにがしたいの？

好きってなによ。あー。

静まり返った放課後の教室はなんだかむず痒い。



いつも聞こえてくるボールを蹴る音や管楽器の音は今日は消え、時計の針が進む音と微かな息遣いだけが空気を伝わって聞こえてくる。

「牧はなかなか優秀ですね」聞き慣れたゆったりした声が言った。

ここにいるのは、40代50代10代の男男男。教師医者学生。スーツスーツ制服。メガネ髭ねこつ毛頭。それからそれから…

「3年次から理系クラスになるのは異例なんですけどね、うん、よくやっていますよ。成績は常に上位です。」チラリと横をみると親父が髭を触りながら、ふむふむと頷いていた。…あれ、こんなに痩せてたっけ。

「ただね、」中肉中背の体をよいしょと立て直し、メガネの奥の垂れた目をこちらに向けて言った。「意思がないんです。」

親父は呆れてこつちを向く。俺は苦笑いするしかなかった。

意思がない、とはよく言われたものだ。

自分の考えがないのである。考えていないのではない、物事に薄着なのだ。理系に転移したのだからって教師と家族に勧められたからだ。た。

二年に進級の際、文系に希望を出した俺を親父は何も言わなかったが、長男の俺に親父の後を継いで欲しいと思っていたに違いなかった。去年、母さんの15周目で姉ちゃんが真面目な顔して話してくれた。

我が家は父子家庭である。仕事で忙しい親父に代わって、9つ離れた姉ちゃんが俺の面倒を見てくれた。その姉ちゃんが、去年結婚し、

家を出て行った。姉ちゃんだけじゃない、俺も来年大学進学を期に家を出るつもりだ。

あと8ヶ月もしたら、広い家に親父はひとりで暮らすことになる。そんなことを考えると胸のずっと奥がキュツとなって苦しくなる。苦しくて悲しくてどうしようもない気持ちになるから、なるべく想像しないようにしてる。

元々意思が薄弱なのに、さらに判断を鈍らせるこの胸の痛みは俺の敵だ。

好きなものはすき、やりたいことはやりたい。

それが羨ましくて眩しくて、自分には足りないものだと分かってる。

うん、

だから恋するたいちゃんが羨ましいんだろうな。

三者面談は、夏休み明けの全国模試の結果で受験校を絞ることで話がまとまった。

学校を出ると親父はネクタイに手をかけ、苦しかった、なんて言った。それよりも言うことがあるだろうよと息子心に思ったが、頭をポンポンと叩き少し微笑むもんだから何も言えなくなってしまふ。またあの気持ちしが押し寄せてきそうだったから、用事があるとして校門で別れた。

夢をみた。

俺は鳥になって、空を飛び回っている。誰にも邪魔されず、誰も邪魔せず、空の広さと雲の揺らぎを肌で感じて。

風に乗って下降すると、学校の校庭が見えた。

大きなパスを受け取った少年が、ひとりふたりと敵を抜かしていく。ゴールは目の前。少年がボールを放った。しかしキーパーの胸の中へと吸い込まれていった。

悔しがる少年たちと終了を告げる笛の音。――ああ、これはあの時の俺たちだ。

夢のなかで急いで俺は自身を探す。栗色のねこっ毛……いた、俺だ。

あのと俺は何をしてた？

どんな顔でゴールを見てた？

そのとき俺は――…。

そこで目が醒めた。

体中が汗でベトついてて気持ち悪い。でもそれより胸がムカムカして、そのほうがよっぽど気持ち悪かった。

水を飲み Kitschin に降りると、なんだか無性に悔しさが込み上げてきた。無意識に涙が頬を伝ってるのが分かる。

なんで泣いてんだよ。くそ、意味が、意味が分かんねえ。

分かんないわかんないワカンナイー…。

涙はいつの間にか嗚咽へと代わり、誰もいない台所で俺はいつまでも泣き崩れていた。

夏休みが終わり、全国模試の結果が届いた。

夏休み中は、親父の寂しそうな横顔とか鳥の夢とかそーゆーの思い出したくなかったから、暇さえあれば勉強に没頭した。だから、密かに模試の結果には自信がある。

だけど、あえてまだ封を切っていないのは、この封筒の中に夏が全て閉じ込められているように感じたからだ。開けてしまったら、もう夏が終わってしまうような気がして、そのままにしておいた。

夏休み、塾帰りにたいちゃんとサクラチヒロを見かけた。

たいちゃんが嬉しそうに笑って、サクラチヒロも応えるように微笑んでいた。

俺はそれをどんな顔で見ていたのかな。

笑ってたかな。

…笑ってほしい。

たとえ世界が俺を必要としなくなっても、笑っていたい。

苦しいほど愛おしい瞬間を、泣きそうなくらい尊い瞬間を、目を離さないで笑って見ていたい。

ああ、

どうか封を切ったとしても、ふたりがずっとずっと笑顔でいれますように。

\*\*\*\*\*

あなたのことを、

\*\*\*\*\*

~~~~~ アナタノコトヲ深く愛セルカシラ??

コンポから流れるメロディに耳を傾ける。この曲、私だいすき。居心地のいい声に今にも眠ってしまいそう。

ピンポーン。

眠気を吹き飛ばすかのように、部屋のチャイムが勢いよく鳴った。

来たわね。

今日は恋人との七回目の記念日。あの日から七年が経ち、私たちは25歳になった。そして記念日を私のアパートで祝いに、彼がやってきた合図に違いなかった。

ピンポーン

「いま出ますよ」

ドアを開けると、愛しい愛しいあの人が笑顔で立っていた。七年前、下駄箱で話しかけてくれた笑顔のまんまで。

「ハッピーアニバーサリー！」

彼はそう言って小さな箱を差し出した。箱の中身は、7年間の思い出に相当するくらい煌めいている指輪だった。もしかして、そう感じた刹那、彼の目が私を捉え、そのまま自然と顔が近づく。

ちゅっ。

優しいキスのあと、次のステップへ進む言葉を彼は言った。「ずっと、ずっと一緒にいよう」

驚く私を横目にCDがまた一から再生された。

~~~~~ アナタノコトヲ深く愛セルカシラ？

…うっん、違う、と私は私自身に言った。

あなたのことも、と言って彼の指輪を受け取り、あなたのことも、と言ってお腹をさする。

あなたのことも、

あなたのことも、

深く愛していくからね。

私は泣いた。

彼も泣いた。

小さい命だけが、まだ泣かずに深い海底で眠っていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*



あなたのことを、（後書き）

引用

S p i t z 『冷たい頬』

\*\*\*\*\*

なんのために、私は生きてるの？

果歩は、ベッドに寝転がり天井を見上げながらふと思った。

いや、小さく口にしていたかもしれない。

けれども横で眠る男の寝息にかき消されて、冷たい部屋にこだま  
なかつた。

わたしは…死にたいわけではないのよね、と果歩は自身に問いかけ  
る。

自ら自分を殺めるほど強くも弱くなかつたし、憎くも愛してもなか  
つた。

そもそも、人は否が応でもいつか必ず死ぬのだ。その流れを自ら断

ち切るなんて自然の原理に反してる、と果歩は考えていた。

だから、私は自殺なんてしない、と。

ただ、問題があるとすれば死にたいという意味がなければ、生きていとも思わないことだった。

「…なんのために生きるかなんて、

ふと、男の声が蘇ってくる。横でスヤスヤ眠るこの男の声が。優しい優しい声。

「なんのために生きるかなんて、人それぞれ違うんだ。

仕事のため、趣味のため、愛する人のため、誰かとの約束のため。みんな違ってるから、だから自分は何の為に…なんて不安になるのかもしれないね。

大丈夫、

果歩ちゃんも焦らないでそれを一生かけて見つければいいさ。

ああそつだ、生きる意味を見つけるため生きるってのもいいかもしれないね。」

生のための生…。

答えなんかない問いだなんて承知の上だった。どんな答えだろうとも期待してなかった。そうと知っていても聞いてみたくなかったのだ。自分以外の考えを。

まだまだ答えは見つかりそうにないな、と果歩は息を吐く。

でも、それでいいなかもしれない、とも思った。

とりあえず、

と果歩は小さく呟く。今度は確かに自分の意思で呟いた。

「とりあえず、わたしがいますることは寝ることだな」

果歩は幸せそうに眠る男にキスを落とす、温まった布団に潜り込んだ。

\*\*\*\*\*

## 深夜の徘徊。

\*\*\*\*\*

夜22時半

ほら、今日もやってきました。

「いらっしゃいませ」

「彼氏いるの」

「520円でいっしょます」

「あ、むし？」

「1020円お預かり致します」

「これ、おれのアドレスだから連絡してね」

「500円のお返しでございます」

「絶対してよー!」

「ありがとうございます」

「ねっ!」

「…」

橘かおる、23歳。職業、大学院生。

あたし、どーやら高校生にナンパされてます。

あの客と初めて出会ったのは、先月のことだった。

講義を終えて、いつもどーりバイト先のコンビニに向かう。

その途中、道に横たわる少年を見かけた。

道の真ん中で大の字になって、寝っ転がってる学ラン姿のオトコノ

コ。

触らぬ仏に祟りなし。知らないふりして通り過ぎようとした瞬間、奥二重の目がこちらを向いた。「…えっと、あの…大丈夫ですか？」目を背けることも出来なくて声をかけてしまった。

「…」 答えない代わりに少年は手足を動かしてみせた。どうやら体は健康体らしい。

「…車通りが少ないとはいえ、危ないですよ」

「…」 返事はない。このままでは埒があかない、会話も続かない、バイトも遅れる、ってか怖い。「…で、では」 色んな言い訳を頭でして、立ち去ろうとしたその瞬間だった。「おねーさん、」 少年が口を開いた。

「おねーさん、俺、またフラれちゃったあ」

それから毎日、その少年はバイト先に顔を出すようになった。時間は決まって22時半。きつと部活かデート終わりの電車の時間なんだろう。

毎日、というのはバイト先で彼の存在はすっかり有名で、あたしが入っていない日でも店長やバイト仲間が今日も来てたよ、なんて教えてくれる。

彼の名前はマチダカオルというらしい。先日、店長が教えてくれた。

漢字表記にすると、町田薫。さつき渡されたアドレスを記したくしゃくしゃの紙に丸っこい字で書いてあった。町田薫。これは、私しか知らない彼の情報である。

「俺ら、かおる繋がりなんすねー！」薫くんは、カウンター越しに嬉しそうにそう言った。わたしは、どう答えたらいいか分からなくて、ただ「520円になります」としか言えなかった。

薫くんは、大抵同じものを買っていく。ジャンプと肉まん、それからジューズ。その3つが曜日によって増減したり、時々ガムがプラスされる。

薫くんは、すぐくモテるみたいで、いつも違った女の子と歩いている。わたしは街やバイト先で何度もその姿を見かけた。

きっと私もそのひとりなんだろう、と時々思う。

薫くんにとってコンビニに並ぶ商品のようには、気分によって買うものをとつかえひつかえする、そのひとつに過ぎないんだ。だから、あたしはどんなに薫くんが親しげに話しかけてきても、くしゃくしゃの紙を開くことはなかった。それどころか、ポケットの奥へ奥へと押し込んでいったのである。

捨てることもしない、開くこともしない。宙ぶらりんな心がそこにはあった。



「それは、恋よ。」

学生で賑わう昼休みの食堂で、原野田さんは言った。彼女は私が所属する院の事務のおばさんだ。推定40歳。中学生の息子さんがいるらしい。昼間は学生の世話・夜は家族の世話、というのが彼女の口癖で学業だろうがプライベートだろうがとにかく首を突っ込んでくる。

「はあ。恋、ですか…」

「そうよお。橘ちゃん、ずっと彼氏いなかったしチャンスよ、チャンス！」原野田さんは、キツネに似た目をつりあげて、うどんを嚙りながら続けた。「相手が高校生だろーが、なんだろーが、気になっちゃったもんは仕方ないのよお。恋ってそおいうものだものお。とにかくピッピッピッとメールしちゃいなさいなあ、ピッピッピッとね！」

その日、薫くんは22時半になっても23時になっても来なかった。次の日も、また次の日も、そのさらに次の日も。薫くんが顔を見せなくなつて一週間が経った。

さすがに店長も不思議がつて「橘さん、知ってる？」なんて尋ねられたけど、「知りません」とだけ答えた。知るわけありません、

が正解だったかもしれない。彼が渡してくれた連絡先を、あたしはまだ独り占めしてたのだから。

その日も退勤時間になり、あたしは裏口から部屋を出た。3月の夜風はまだ肌寒くて、あったかいものでも買って帰ろうと私はコンビニに入り直す。

ジャンプとジュースと肉まんとかム。

それを無意識に取っていた瞬間、原野田さんの言葉が頭に浮かんできた。

――…恋ッテソウイウモノナノヨ…

そうなの？

原野田さん。

恋ってこんなに無意識で愛しくて切ないものなの…？

会いたい、と思った。

バカだ、

なんにも始まってないのに、こんなにも好きになってしまったんだ。

あの紙切れと携帯電話を急いで取り出す。気持ちに気付いた以上、

一刻も早く行動しなきゃ手遅れになってしまう気がした。ピッピッピ、とテンポ良くボタンを押していく。最後の一文字になって手の動きが一瞬弛んだ。手が震えてるのは寒いから?…違う、あたし、緊張してるんだ。

プルルルル…

出るかな、出ないかな。

プルルルル…

もしかしたら、いまあたしは有効期限の切れた切符で電車に乗ろうとしているのかもしれない。それでもいい、それでもいいんだ。

プルルルルプルルルル…

もし、彼が出たらなんて言おう。まず、名前を言って、それから。

プルルルル…

どうしよう、なんて言ったら伝わるのかな。

プルルルル…

お願い、おねがい。

プルルルル…ガチャ「もしもし?」

薫くんだ。

この気の抜けたような声をあたしは聞きたかったの。

やばい、手の震えが止まらないよ。

でも、今度の震えは寒さでも緊張でもない気がした。あたし、薫くんの声が聞けて嬉しくて震えてるんだ。

声にしなきゃ。

伝えなきゃ。

伝えなきゃ。

伝えなきゃ。

伝えなきゃ、 伝えたい。

「あれ？もしも〜し？」

言いたいことはまだまとまっていなかったけど、あたしは覚悟を決めて息を吸う。空気はひんやり冷たくて、今は確かに冬の始まりなんだと感じさせてくれる。口を開くと、白い息が目の前に現れた。

白い吐息が、私の勇気の証だった。

\*\*\*\*\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5271o/>

---

et cetera.

2010年12月11日00時20分発行